

心筋炎の炎症の指標に免疫グロブリン遊離軽鎖が有用である可能性

心筋炎による心不全を発症したマウスでは、免疫グロブリン遊離軽鎖の発現が増加することが著者らの過去の研究により示されている。そこで本研究では、心筋炎による心不全を発症した患者を対象に、炎症や免疫において重要な役割をもつNF- κ Bの活性化の指標として、免疫グロブリン遊離軽鎖が有用であるかについて検討した。

米国の心筋炎治療研究に登録されている、心筋炎による心不全を発症した患者 111 例と健常者 75 例を対象に、血清中の炎症性バイオマーカー（指標）である免疫グロブリン遊離軽鎖を測定し、 κ 鎖/ λ 鎖の比を調べた。結果、 κ 鎖/ λ 鎖比（中央値）は、健常者群（2.26）と比べ心不全患者群（1.45）で有意に低下した（ $P < 0.001$ ）。さらに、 κ 鎖/ λ 鎖比は生存の予測因子としても活用でき、N 末端プロ B 型ナトリウム利尿ペプチドと組み合わせることで、3 段階に分けた予測が可能となった。

したがって、免疫グロブリン遊離軽鎖の κ 鎖/ λ 鎖比は心筋炎による心不全発症の有用な指標となる可能性が示唆された。

出典：Clinical Immunology 217(2020) 108455.